

號 五 第 卷八十第

- 月 五 年 三 十 正 大 スミ ス讠 自作農地創定施設要項を評す 海 投資ご租税 マ 水戸藩常平倉の成立 フォンウイゼの社會學論 ル 運 同 スの植民地觀の由來で地位 ス クスの勞賃論 の學説に開福 盟に對する英吉利の態度 說 雜 溡 論 苑 鵨 叢 田 博 · 經濟學士 經濟學士 文學博士 經濟學士 法 經濟學 博士 學 -1: 長 森 米 神 谷 涧 小 本 島 庄 田 田 田 戸 口 ·耕 榮 昌 庄 Ξ 吉 嗣 Æ 太 治 太 猦 猽 彦 猽 鄍 猽 雄 源

福田博士の教を乞ふ (二) アダム・スミスの學説に關して

谷 口 吉 彥

Ŧ, 目次——一一、緒言 スミスの道徳哲學 = スミスと資本主義經濟學 六、「諸國民の富」の第五卷に就て ll'、スミスと重防主義 七、スミスの倫理學説 呵 スミスと價格經濟組織(以上本號掲載 八、「厚生哲學」及び「第三帝國」に就て

7

ル

アダム・スミスの學説に關して福田博士の数を乞ふ

第十八卷

(第五號

提供せられたことは、私共後學にとつてどれ程仕合せなことであつたらうか。中に就き福田博士 學界に於ける最高權威の一人である博士の論文に對し、私は特殊の興味を有つて精讀した。 勞作中最も特色あるものゝ一であらう。私の常に尊敬する經濟學者の一人であり、また吾が經濟 が最近發表せられた所の『厚生哲學の鬪士としてのアダム•スミス』と題する論文は、 ム•スミスの 生誕二百年を 記念するために、彼れの學説に關する名數の勞作が、吾學界に 九九) 九六一 是等多數の

第三卷第二號。

られ、 寡聞 として取扱つて居られる。 て之に關する有益な論文が發表せられ、 しき特徴を有するものであつて、 0) 抳 玾 にして誤りなければ、 生活とが Š 其後多くの學者の頭を惱ました問題である。 た間 如何に調和さるべきかの問題であつて、 題 は ス ξ それ 然るに福田博士の研究は、 スに於ける經濟學と倫理學とを如何に結合すべきか、 はスミスの死後まもなく、 私は今更の如く博士の着眼に敬服 註 這回の機會にも亦長谷田泰三氏が同一 吾國では旣に大正七年藤井健次郎 是等の同じ問題に關する諸論の中、 其は必ずしも新らしいものではない。 彼れの友人 ステゥアト 卽ち經濟生 に依つて提供 の問題を主 横士に 特に著 依 私 活 題 ح

する程私 を尊敬する所以でもない。 (鮭)此の論文は大正七年四月十四日東京帝國大學文科大學哲學會の春季公開講演に於て、 である。 は自惚れて居ない。 常時東京に居た私は、 敢て博士の教を仰ぐ次第である 此の講筵に侍して、 アダム・スミス の名を深く印象したのであつたが、 けれども既に疑を有して質さいるは學に忠實な所以でもなく、 藤井博士が發表せられたもの×筆記 それから滿六年を經 博士

又彼れは道德感情論者でもなく、 利己主義經濟學者でもなく、 漰 過した今日、 田博士 一の主張 博士の論文を新たに讀みかへして、今昔の感慨に堪えぬものがある。 に依れ は 彼れ ス 3 の經濟學に於て主張する所は、 ス は、 今日 普通に言は 彼れの倫理學に於て提唱する所は、 るく如 く資本主義經濟學者でもなく、 經濟生活の自然法則觀である。 叉

同情論者でもなく、

倫理生

蟷螂の斧を揮は

時

また私は、

博士の所論 一は闘爭の間

カ

眞理

|に見出さるヽ』といふ博士の言葉に煽動されて、

に對して多くの疑問の湧き出づるを 禁じ得なかつた。『學問

せざるを得ない。

併し乍ら

ΙŻ

鬭

争で h

- 3) スと利己心』經濟學論集第二卷第一號。
- 商學研究、前揭號、三九〇頁**。**

生涯奮鬪を續けたものだと言ふにある。 學説は、 家生活であり、 活の理性 追つたものでもない。 であらう。 志を發見された譯であり、 てさうであらうか? 正しく博士の唱道さるゝ厚生哲學と一致するものであり、 法則觀である。 疑問の順序は必ずしも博士が論述の序を追つたものでもなく、 此の國家生活に於ける統制原理は國民の幸福であると主張する。 私は之について少からざる疑を有つ。以下私は順次それにつ さうして此の經濟生活と倫理生活とが調和し統一せらるへ所のものは に私の便宜に從つて排列したものである。 他方から言へば、 果して然らば、 博士はスミスの再現でもある。 博士は茲にスミスに於て其の有力なる同 彼れは厚生哲學の鬪 又理論構成上の順序を 併し乍ら事實は果し 從つて いて敷を乞ふ スミ 士さして ス

Ξ

軍國主義との間 或 認』を以つて其の根本主張の一となし、 יי ム・スミスは今日所謂資本主義の經濟學に對しては屢々抗爭して居る』ものであり、 と言は る意味に於ける軍國主義者であるから、 私は先づスミスと資本主義經濟學との問題に就て博士の敎を 仰ぎたい。 資本主義經濟學とは、 るい。 私は第一に、福田博士の言はるく資本主義經濟學とは何を意味するか、又それ に如何なる關係 第一に ありと認めらるへかに就き、 『資本主義の經濟組織の下に於ける各個人の利已的活動 第二に其の必然の結果として、 其の理由に依つて彼れは資本主義經濟學の代表者でな 博士の教を受けたい。河上博士に從 資本主義の經濟組 博士によれば、『アダ 且つ又彼れ の 下 0

說

苑

アダ

ム・スミスの學説に關して福田博士の数を乞ふ

第十八卷

(第五號 一〇一)

九六三

-) 商學研究、前揭號、三九二頁
- 6) 同上、四〇三頁。
- 7) 河上博士者、資本主義經濟學の史的發展、一三六頁。

學さ謂 主義 私の 立すべ 義者で もの の言ふ所を で ことを主 種 に於 虚據立て あ σ 資本主義その な實際 0 ć るこ 見 節 0 「積を遂行 斯 H 結 發展 は無い 2 あ 疇 學を以つて此 は る 論の誤りであると同 ž ء ا 張 Ċ, 所に 百 るこごをも 1= 3 左 に於 đ カゞ 2) 3 屬 ` 由 に引 る途中 る反對 寸 さ思え 事 させられ、 依 る』事實を以つて、 す 0 放 íţ て軍 る為 實で れば、 ź 任 ě 用 嵌 Ŏ 概念な *)* ' 意味 換言 図 Ü đ ナ め Ō 其 策 カオ は \pm 資本主義 如 るであらう。 10 つたにしても、 Ø 0) 平 彼れ 義 は 併 Ě 4 結 和 常 岩 る 得 ぼ 觀 張 し實際には、 的 常 は じく < 7 軍 カコ 念する場合には、 を Ċ ľ で重 於 は國家主義を伴ひ 他 0) 國主義者であ 他 'n 一彼 あ かく考 他 資本主義 様 0 0 て『資本主義 る 誤謬である。 袓 國主 に思 根 0) n حح 會又 社會 その カゞ 本 義とは (> 資本主義 資本主義 は 的 事 5 組 的 特徴 は ፠ n 8 結 他 T 紭 は ņ るさ言 \hat{o} 文 艞 めとなすも の 論 は無 z n 0 抽 永遠性 易 階 は 經濟 は 念 然 象 0) ス 經 くし 級 他 11 ……それ故 į, 的 0) るに博士は、 ŧ ふことは、 軍。 學の 資本 濟組 倾 10 0 範疇を異 ス Į, 0 [n] 對 カジ 阼 ·國主義若く のであ は τ 主張』 主義 を有 盛ろ 級 彼 樹 す 縬 國历 $\hat{\Sigma}$ 3 3 0 n 』を産み に吾 資本主 壓 重 者 が す 接 ጒ *o*) にする の必要を説き』 301 Z 쒜 資本 T 資本主義と軍 觸 に於て資本家の 國 ない Þ 0) *)手 す 主義的 は さうしてそれ Ó 出し 性 私 段 主 カ> 國 ることを要し、 |義者であることをも 6 結論 義者 家主義 質 ځ は を必要さす Ŀ 此 であ Ü Ť 居 は、 好 0) Ċ ふこと ス Ž <u>L</u>13) 戰 點 đ, Ē 國主 2 3 資本主義は平和 に就 Ħ 軍 ŔΊ る ス は か が資本主義 を最 Ċ ろ 的 カコ カゞ ۲ 隊 義 槪 G 従つて 0) 軍國 から、 とす 言 念上 で あ 否 ځ る ŧ 必 あ カコ は カゞ ブ ح を示 主 有 更 恰 配 圣 3 3 3 デ 資 ンロ 資 資 力に 義 な b 會 < かぇ

o

兩

91

ዱ

同上、一七四頁。 河上博士著、社會問題研究、第 商學研究、前揭號、四〇三頁。 9) 10)

阿上博士者、社會問題研究、第四十五册、一二頁(通册一五九二頁)。 商學研究、前掲號、四〇三頁。 11) 同上、四〇三頁。 同上、四〇三頁。 13) 同上、四〇六頁。 Rosa Luxemburg, Die Akkumulation des Kapitals, 32 Kapitel: Der Militarismus als Gebiet der Kipitalakkumulation (SS. 431—446). 12) 14)

Louis B. Boudin, Socialism and War (1916). 15)

的 でもなく好戦的でもないが、 唯其の發展の階段を異にするに從つて、或は平和的の、 或は好戦

的 の傾向を採るに過ぎないといふことである。

資本主義的 社會の生涯をは、 此の目的に従つて 分割するならば、 少年から 成人に成育するに 三期とすることが出來る。

は 數多の戰爭を 伴ふが、 其の若き時代にあつては、 ………一たん成人に達した後は、 資本主義は 戦闘的である。それが 資本主義は 平和的となつて 來る。

其の全盛期を經過して、下り阪になつて來ると、 然るに資本主義が ・此の語を解して自由競爭の原則に立脚せる社會であるとするならば 恐ろしく癇癪を起して、其の初期の好戰

傾 向に復へる』と。

くの如く資本主義其の ものは軍國的でもなく平和的でもなく、 唯其の發展の階段に於て軍國 `機な軍

主義と結び付くべき多くの機會を有するものとすれば、 主義者であつたとしても、 此の事は、『彼れが資本主義經濟學の樹立者でないといふ。ことを最 スミスが果して博士の言はる~

本主義と帝國主義若くは軍國主義とが如何に相結んで進み來つたかを看過さるヽ筈はな 有力に證據立てる』ものであるとは思はれない。東西古令の史實に通曉せらるヽ福田博士が、 之を不思議に思ふ。 私

ものでは 唯茲に博士の謂はるヽ資本主義若くは資本主義經濟學が、 得ない ない カュ かの疑が起る。 b 知 n Ŋ 且つ又資本主義を如何に觀念しようどもそれは論者の さうして然る限りに於ては、 ス 今日普通に言はるくそれ ₹ ス は資本主義經濟 自由 學の C あり、 さ は 創 設者では 别 12 種

あ

苑

'n ム・スミ

スの學說に關して福田博士の敎を乞ふ

第十八卷

(第五號

九六五

Louis B. Boudin, ibid., pp. 48-49.

福田博士、商學研究、前揭號、四〇三頁。 17)

說

見解 居 ふであらう。 る。所の『ネミ Ó 相 違 に過ぎな スは資本主義經濟學者である』との説に對しては、 問題ではあ るか、 併 ï ^{IB)}さうなると、 博士の 否定論 全く無意味 は、 『世の中 のものどなつて了 に行 は τ

次に博士が

spirit λ 使つては居るが、併し彼ずる不便ではなからうか ij の列撃 あ る <u>ニ</u>2 富論 定されてしまふからである。 を齎らすのであらうか? か Ą. Š 『第一に商業的精神といふものは人の見識を狹くしてしまふ。』『第二に 商業的精神 の見解を狹くする』理由を述べて、『分業が完全に進んだ 所では、 ふと國の敎育といふものが蔑ろにされ かどうか、 資本主義的精神から生ずる不便な點』を列撃して 居るとい と繰返し述べられる所のものは、 b 軍事 なけ た三個 的 れば道德威情論の中にもなくて、 スミスの資本主義經濟學者なることを 否定せらるヽ有力な 第二の論據として、 精 又スミス の不便 斾 を消滅せしむる』といふ點であるが、 (inconveniences) が、 n ? か の真意が其處になかつたことは明らかである。 それは言ふ迄もなく分業が行はれる結果、 事實左樣に 解して居たか 然らばそれは『商業的精 成る程スミ ス自身も スミス ,る。」第三に『商業の他の惡しき結果 商業的精神若くは資本主義的精神から生ずる缺陷 ъš 他人の編纂したグラスゴー大學の講義筆記の中に arising 『商業的精神、 どうかを吟味して 榊 from a commercial spirit 然らば何故に商業的精 ら生ずる不便 ふ事實である。 近頃の言葉で言 人間の生活が あらゆる 見 た 彼れは第一に ではなく、 ريا は人間の勇氣を挫 人間は一の單純 謂 私は先づスミ スば 神は是等の とい ふ所 分業か 小局 capitalistic それ カゞ ふ文字を O) 部 は 不 B 缺陷 ΙŽ やる 便ご 國 ス

顧田博士、商學研究、前期 同上、四〇三一四〇四頁。 同上、四〇五頁。 同上、四〇六頁。 19) 同上、 同上、四〇四頁。 同上、四〇五頁。 同上、四〇五頁。 ibid., p. 255, 18) 20) 前揚號、 二頁。 21) 23) 25) $\overline{22}^{\circ}$ 24)

26)

Lestures, p. 255

なる作業のみを爲さねばならね』からと言心、第二に『敎育が大變忽かにされる』のは、『分業がいる作業のみを爲さねばならね』からと言心、第二に『敎育が大變忽かにされる』のは、『分業が 總ての職業を極めて單純な作業に化して しまふから、 分業から生するさいふにあつたことは明らかである。 らであると言ふ。是に由りて觀れば、 ての商業に於て無限に行はれるから、 る』からだと言ひ、第三に『それが人間 國民の富』に於ては、 是等の事柄は明らかに分業の弊害さして述べられて居る。今分業の結 あらゆる人間の考へが一特定の事柄に關してのみ働く』 『の勇氣を挫き軍事的精神を消滅せしめる』のは、『分業が總 スミスの言はんごする所も亦、 而してスミスが更に思索を進めた所の、『 極めて 幼少な子供を 使用する 是等の『不便』が總て直接に 機會を與 ځ

ふ所を引用して一 一二の作業に限られて來る。然るに大多數の人々の理解力は、 "分業の進むに従つて、勞働によつて 生活する 人々卽ち大多數の人々の仕事は、 例を示すならば、 彼等の日常の仕事によつて形成 極めて單

して如何に人間の精神能力が沮害せられ、

其人の見解が狹められるかに就き、『諸國民の富』に謂

れるものであるから、 恐らくは常に殆んど又は全く同様である所の人々は、 **、従つて彼れは自然にかくる理解力を働かす習慣を失ひ、** 其人の全生活が一二の單純な作業を爲すために費され、 彼れの理解力を働かせる機會を有 さうして一般に馬鹿となり無智と たな

また其仕事の結果

なつて來る。

þ3

不可能ならしめるのみならず、 "彼れの精神の鈍感なことが、彼をして 理論的な會話を味つたり アダム・スミスの學說に關して丽田博士の数を乞ふ 寛大な、 高尙な、 **優しい感情を懷くことが出來なくなる。** 第十八卷 (第五號 一〇五) 九六七 その結

苑

ibid., p. 255. ibid., p. 256. ibid., p. 256. ibid., p. 257. ibid., p. 257.

之に喙を容れたりすることを

28) 29) 30) 31)

ない。 果さして、 私的生活の日常の義務 に關する多くの事柄に就ては、 彼れは全く判斷することが 出

える。 نا に於ける熟達は、 く不可能で して彼をして…… さうして極めて特別 \bar{n} の國家の ある。 彼 彼れ 利 害さい 'n 冐 の精 險的 の固 な訓練をなすでなければ、 ふ樣な 定的 꺠 な兵士の生活を嫌忌せしめる。 的 な生活の不變なることが、 **社會的、** 大きな廣い 及 び軍事 事 柄に就ては、 的能力を喪ふことによつて獲得され 戰時に於て彼れの國家を防衞することは等 かくの 自然に彼 彼 れは 如 くして彼れ自身の特定 n **全然判斷** O) 精 神の する 勇氣を挫き、 7 7 カジ る様に見 Ō 出 職 さう 來 衣

7)-の職 出 るを要しな 尙 來 ほ是等の事 業に就 Ď, ね る か カュ は『諸國民の富』の他 5 ねばならぬ』と言ふ 博士が 彼等 **つ**それ は働くことが は不幸にして Wealth 0 個所に於ても繰返 出來るやうになるど、 얁 し逃 Nations 7 直ちに自分の生活資料を儲け得 る所であるが、 にはない。又 今はこれ Moral Sentiments 以上引 る何

主義經濟學者にあらざること 事 i. 然ら 柄 もない。併し が ば 北 幸 か不 0) 如 幸 < Lectures ス カコ Ē Wealth of Nations に於て、 ス かす Ħ 分業の弊害を認 the University of Glasgow 0) 證據となり得 め た事 るかどうか? 此の 實 は 如 果して博士の く明 にあるのであります』と言はる、是等の 私 瞭 は此點 に述べられてゐる。 謂 にも亦疑問なきを得ない。 はるく 様に、 彼 n の資本

Wealth of Nations, Bk. V, Ch. I, PT. III. Art. II. (Cannan's ed. Vol. II., pp. 267—269).

彼等は教育のた

めに

割

7

~

き時間を殆んど持たね。

彼等

0)

兩

親は、

幼少な

彼等を

養ふことさ

³⁴⁾ 何へば、同上、Vol. I, pp. 128—129. Vol. II, p. 192.

³⁵⁾ 商學研究、前楊號、四〇六頁。

ない。 右の分業弊害論を指摘するを要しない。より有效な 多くの根據を 列撃 するこさが また常備軍制度を主張せんための有力な論協さなつて居るものである。 事實可能であることを彼は信じた。否スミスの分業弊害論は、 元來スミスが此の如く分業の弊害を論じたのは、言ふまでもなく分業を否定せん爲 經濟の弱點を擧ぐるの故を以つて、 併し乍ら私は、 『是等の缺陷を救濟せんとすることは、 旣に述ぶるが如く、 彼れは資本主義經濟學者でないと言ひ得るならば、 資本主義經濟學者であるかどうかの問題は、 **眞面目な注意に値する問題』であり、** 彼れが國民的普通教育を高唱し、 **今若しスミスが資本主義** 又その救濟は 出來るであら め Õ) さうした所 必ずしも 議 ľ

に脳

別

の標準が

あるものとは信じない。

を捉へて、直ちにそれが『商業的精神』から生ずる弊害であると做し、 それ 業的精神と同視せられ、更に博士に於て分業は資本主義的精神と同視せられて居るのであつて、 それは『資本主義的精神』から生するものであるとせらるく點である。 形 る。 極 、態を以つて其の一般的形態と看做すの傾向を有してゐたのである。さうして此の事は又大體に で不 .ほ之に關聯して興味ある一の問題が殘つて居る。それはスミスが分業から直接に生ずる弊. が長 スミスは此 元來スミス ·用意 き將 水 0 間 カゞ 12 の組織を以つて長き期間に亘る歴史的發展の成果であるご看做 研究の對象となしたものは、大體に於て資本主義經濟組織に屬するものであ に現はれた 亘つて歴史的發展を續けるであらうことを無意識に認め、 ム・スミスの學説に關して福田博士の数を乞ふ 此の 些細なことが、 私には甚だ 興味あることの一として 感ぜられ 第十八卷 (第五號 卽ちスミスに於て分業は商 更に博士が之に註釋して、 (中) 社會組 九六九 したにも拘らず、 絥 の歴史的

苑

アダ

_ O^

說

苑

き兩者 主義經濟學者 うか? 業と商業との同視は、 離の關係にあるは、 は誤りであ 考へない。『私的交換が 分業を豫想 することは正しいが、分業が私的交換を豫想するとい ぎぬさ觀る所の を捉へて、直ちに商業の發達より起る不便であるといふスミスの不用意な言葉がある譯で、 どが ス 本主義の經濟組織の下に於ては密接不可離の のであつて、 本主義經濟にあつては、 於て資本主義經濟學者に共通の特徴をなすものであるが、 ス ミスとしては極めて當然のことである。 が資本主義の代表者だの創立者だのいふ事はどこから出て來るのか、 ※離るべ 『分業に依る生産 Ō さうして更に之を資本主義的精神と同視せられ 混同を生ずる謂 る』とマル からざる觀念として現はれ 來ることは極めて 當然であらう。 の部類 商業なくして分業はない。又分業の發達なくして商業の發達は期し難 社會主義經濟學者にあつては、 單に一 に属せられ 却 クスの謂つた樣に、 分業は個人的交換による賣買制即ち商業を前提としてのみ成立し得 'n つて彼れが資本主義經濟學者であることを自ら裏書するものではな 富の社會的生産――は、それ自身に於て成立し得るものではない。』 の歴史的形態に過ぎないと見るから、 はないであらう。 るのでは なからうか 分業は必ずしも營利的 然るに資本主義經濟組織を以つて一の歴史的形態に過 果して然らば、 關 分業と商業とは必ずしも不可離の 係にある ? それ た福田博士も亦、 か 此の如き立場に立つ時は、 は兎も角、 ら、そこで分業の發達から起る弊害 スミスが不用意の間 此の派の學者にあつては此 商業を豫想しない。 福田博士は、 同し理 蓋し私の甞て 述べた 其妄なることは三頁か 九七〇 出に依つて資本 に認め ものであるとは ر _{با} __ ア ダ 兩者 分業で商 た所 兩者は が ふこと ム・ス の分 0) 不 るも 資

- Zur Kritik der Politischen Ökonomie, SS. 42-43. 38)

四頁讀 L る左様に考へないものであつて、 の證據となり得るものではなからうかと思ふ。 んで見れ ばすぐ 解 る事 T あ る <u>L</u>39) それ ど謂 は却つてス it 'n 7 ミスの資本主義經濟學者であることを證明 IJ 主の 個所 を指摘 せられて居る 私 は必必

Ŧ

≡

8

存 章 に る(3)に 彼等が 生産物に存する」ことにあつたから、 國の富を殖やす事を目的として、 主義經濟に對す に従へば、 由 3 Ъŝ 貨幣の カ 』といふ點にあるからである。 ス どうかを吟味 ₹ 2國民の幸福を目的とせずして貨幣を目的とした點にあつた樣にも思はれるが、 ス と見らる が資 /蓄積に反對した重なる理由 富に關する重商主義の誤解が攻撃されてある。 ス に對して彼れの主張する所は、 ξ 本 主義經濟 スが ~: る攻撃である。」 き點 したい。 [mercantile system 濟學者にあらずして、 成程彼れが重商主義を論じた『諸國民の富』の第四卷の中、 は 『彼れが 何故か 私は先づスミスの重商主義攻擊の要點が 國民の は 此の點から見る時はスミスの攻撃は、博士の言はるへ樣に、 田博士の数を乞ふ さいふに、 に對して爲した攻擊は、 mercantile system を攻撃して居る」ことに關する。 それ welfare を國民の厚生を進めるといふ事 『富は貨幣若くは金銀に在らずして、 厚生哲學の闘士で かぎ 人間の幸福と無關係で 彼れの攻撃の要點は、 第十八卷 彼等の主張 ある (第五號 今日の言葉を以つて云 こと博士の ――『富は貨幣岩 あるこ 一〇九) 「彼等 、博士の言 張 九七一 えに割 (mercantilists) ば 土地及び勞働 さる は 眼 よりも、 其の 中に 併し くは 3 一へば登古 第三 \ 金銀 最初 所 ゎ ス 0) 博 ₹ į. か 理 あ 本 士

說

苑

プ

ŋ,

ム・スミスの學説に開して福

39)

⁴⁰⁾ 41)

商學研究、前掲號、四○六頁。 同上、四二○頁。 同上、四二一頁。 同上、四二一頁。 Wealth of Nations, Bk. IV, Ch. I, (Cannan's ed., Vol. I, p. 396). 42) 43) 44) ibid., p. 416.

說

旄

位、 n き何 あ 15 ح る どする カコ 1: る。 は出出 何)或る國に於て是等の 'nЗ 図 ならば、 全 ス O) っ 過不 たい 政 等の ξ 政 銀 n 0 0) 一球ない 金銀 府 분 府 0 範 Z $\widetilde{\epsilon}$ 場 勢をも 办 及は自由 Ö) Ö 阿故 圍 重 生 合た を必 由 力を以つてしては不可能であ 政 に限 は であらう。 意が 仓 府 b カコ するた 要以上 政 Ź と言 るを問 必要ごし かゞ 行 らる 策 削ら 放 不必要なことに用 如 不 12 任政策によつて完全に調節せらるくことを主張 何に不寢番をしても其 ふに、 ልን 可 ` 反對 15 分量 能で カコ は Ę Ó なる す ない 蓄積し、 ·であつて**、** す 如 קל לע 彼れに從 出 あ る第二の理 如 國内に於け 何に殘酷な法律』を設けても、 であらう。 有效需要に不足するならば、 外得る限り るどの ζ, 若く 彼 《ひらるヽことは又とあり得ない』 とい 理 『若しも或 へば、 'n は必要以下に減ずることは、 由 b, 此の場合假合其の輸入を防 由 かゞ る貨幣の分量を保持し若く Ó による。 は 重 の輸出を防 方法を講じ 從 商 國に保有せらる、金銀の分量は、 國內 つて此の それ 主義に反對 即ち 10 かり 單 たが、 の ぐこどは出來ない 輸入さる 「歐羅巴 如 に不可能にして不必要なる き政策は全く不 して金銀の ****** 如 併 **~金銀** し其の ぁ 何に靑酷な關稅法』を制定しても、 總て 政府は其れを輸入することに がする點 、は増加 がうさしても效果を擧ぐるこ 到底不可能である。『それ故 蓄積を排 の分量が の 目 Ų 的 國 ふの せん にある。 必要であつて、 を達 民 iţ カゞ 其國內 ימ. 12 斥する所以は、 有 其の 效需 ス め ること Ō Ò さし ₹ B 監視をなす 各子 要を超過 ス ならず、 0) 反して者 は が意見で τ 出 0) 國貨 必要 國 狣 そ ð 75 内

Wealth of Nations, Bk. IV, Ch. I, (Cannan's ed., Vol. I, p. 398), 45) 46)

國富

0)

進

Ē

有

害で

あ

るさ

ĺ٦

を跳

13 ある。

併し此の場合でも、

金銀の蓄積

かゞ

人

問

0)

幸

福

1

有

害で ĻΥ

あ

á

からではなくて、

其の爲めに採る所の政府の干渉政策が、

富の生産の上に有害であると

ል

ibid., p. 402. 47 ibid., p. 402. **4**8) ibid., p. 403. 49) ibid., p.

限ご輸 題ど、 然的 られるさいふこさ、 點 上に如何 生産物の價値を増加するか、 來る丈け少からしむることへ、 入を増加 に論據を置 弁びに是等の金屬が鑛山を有せざる國に齎らされるのは貿易差額………に依つてのみ為 に政治經濟の大目的となつて來る。 Ж 輸出奬勵に關する四つの政策ごを論究して居る。さうして是等の政策は、 なる結果を齎らしたかを吟味せん』としたものである。之が吟味の結果は、 の獎勵であつた』と言ひ、 てくは いて居る。 減少する筈である』との見地から、 此の二つの原理が打ち立てられると、 彼れは此の第四卷第一 若くは減少する傾きあるに從つて、 國内産業の生産物の輸出を出來る丈け多からしむること 第二章以下第七章に至る六章に於て、 從つて國を富ますための二つの大きな機械 章の 最後に述べて、『富が金銀より成るといふこ 『是等の各~が 其國產業の 國內消費のため 明らかに其の國の真の富及 輸入制限に關 の外國貨物の輸入を出 それが 年々 は、 要する 0 する 輸入の 年々 \ 生産物の し得 び收 二問 制

なき 常に生産者 : 商人若くは資本家 成程博士の . ? 後 の利益の爲めに犧牲に供せられて居る』ここを主張する。併し乍ら之を以つてス に逃 指摘せらるへ樣に、 š るが の利己的活動を攻撃するものであると做すことは、 ~如く、 ス 3 ス スが個人の利己的活動を是認する所以は、それが『見えざる手』 ,ス は に於て、 少しく早計に過ぐるの嫌 消費者の利 ミス

說

苑

ŋ.

ム・スミ

スの學説に闖して福田博士の数を乞ふ

第十八卷

(第五號 一一一)

九七三

内國

産業の

振興を目的ごする輸入制限も、

貿易差額を目的でする輸入防遏も、

輸出獎勵の為

めに

する戾稅

B

)補助金も特惠條約も植民地獨占も、

何れ

も總て、

真の國富を増進する所以でないと言

Ē

[Mercantile system

ふにある。

ibid., p. 416. ibid., p. 417. ibid., p. 417. ibid., Vol. II, p. 159. ibid., Vol. I, p. 421. 50) 51) 52) 53) 54)

益

が殆

んど

九七四

『余は、 る。 想から見て、 保護干渉制度にある。 は無用の沙汰である。』これがスミスの言ふ所である。 カコ に導かれて『自然的若くは寧ろ必然的』に社會の公益を增進すると認めるからである。 まふと、 うして最後に到達した結論は、『獎勵若くは制限の總ての制度が 此の如く 完全に取り去られてし る攻撃の要點は、 出過ぎた ない。 いる限 の主張の下に彼れは かの公益のため事業を營むと稱する人々によつて 多くの善事の爲されたる ことを曾て聞 自然的自由といふ簡單明瞭な制度が 自 ら成立する。 商人の中には、 þ おせつかいであり、』それは 彼れが 彼れ自身の 彼等個人の利己的精神にあるのではなくて、 Mercantile system の下に於ける商人の利己的活動を否認すべき謂れはない。 國家が獎勵若くは制限を設けて私人の企業を左右するが如きは、『立法者の 斯樣のことを標榜しつくある者も稀でないけれども、 利益を自ら追及すべく、 mercantile system を攻撃し、 『明らかに壓迫であると共に潜越である』と主張する點にあ 完全に自由に放任せられ、 私の見る所では、 更に あらゆる人間は、 Agricultural system を攻撃 彼等の國家若くは政府が採 ス ミス ……元首は、 の重商主義に 言ふまでもなく之 正義の法則を犯 此 Ō 根本思 8 人間 所の 對す ž

あつたどすれば、 此 あ 如 くス ミス 彼れが mercantile system を攻撃した事實は、 0 mercantile system に對する攻撃の要點が、 博士の謂はる、樣に彼れが厚生 彼等の採る所の保護干渉政策に

か

n S

所の、

所謂自由放任政策にあつた。

は其を導の知慧や

いて社會の

利益

により最も適當な事業に向けしむるといふ任務

知識を以つては適當に遂行することの出來ない所の任務

私人の産業を管理し、

から完全に責任を免

Vol. I, p. 421. p. 123. p. 123. Vol. II.

55) ibid., 56) ibid., 57) ibid., 58) ibid., 59) ibid.,

哲學の主張者であることを根據づけるよりは、 の 一 特徴を具へてゐたこさの裏書さなるものではなからう 寧ろ却つて、 彼れ が自由放任論者として資本主義 ゕ

25

ごすれ 格 見 學者の部類に入るべきものごなるのであるが、 ì が るべ 經 博 一濟の Ϊ きは、 價 かき スミ 、格經濟を『全然否認』して、 やりか 博士の說は實にスミスに關する驚くべき發見であつて、 スは資本主義經濟學者でなくて、 ス たは、 3 スが『消費は生産の唯一の目 7 Ŋ ム•スミスに於ては全然否認せられて居る』といふ點にある。 之に代ふるに必要經濟を以つてすべきことを論じたの :的である』ことを主張し、従つて今日・厚生哲學の鬪士であるこ主張さるヽ! 私は此の點に就ても亦、 スミスは明かに社會主義經濟 博士の敵を乞ふべき多く 第四 0 『資本的價 今若し 办; ~事實 彼

ζ̈ 費を直接 經濟を否認したと認め ふスミスの文句 のものを有 すものでなく、 の文句に續 第一 極めて明瞭であらう。 は博士が の目的とすべきを言ふものでないことは、 Ü は τ 指摘さるへ 國家の立法上又は政策上の目的を指すものへ樣である。 『生産者の 如何なる内容を意味するか、之を以つて博士の斷せらるく樣に、 るここが 私の見る所によれば、sole end and purpose 所の、 利益は、 "出來 Consumption is るか 唯其れ んどうか が消費者の利益を增進するため ? the sole end and purpose of all production > 5 分業の發達を最も重大視した 思ふに此の文句は必ずしも個 は個々の生産者 何さなれば、 に必要であ z 々の生産者 ξ 彼は直 資本的 Ó ス *(*2) る限 Á 見解 的 を指 ちに かき カコ

苑

アダ

、ム・スミスの學説に關して福田博士の数を乞ふ

第十八卷

(第五號

九七五

- 60) 商學研究、前揚號、四二〇頁。
- 61) 同上、四二〇頁。
- 62) Wealth of Nations, Vol. II, p. 159.

第十八卷

(第五號

<u>一</u>四

九七六

他

於てのみ、(政府から) 留意さるべき (ought to be attended to) ものである』といひ、尚ほ續いて、 が總ての生産者の唯一の目的であるごいふ文句と矛盾するものでない。否、 以外にあるべき筈はない。従つて『消費は生産の唯一の目的である』といふ文句は、 とつて最も有利であると做すものであるから、 面に於て、 消費者を損して生産者を利するものとして輸入制限及び輸出奬勵を攻撃して居るからである。 旣に述 3: 3 が如くスミスは個人の利己的活動を是認し、 個々の生産者の唯一の目的は、彼れに從へば自利 又之を是認することが社會に 兩者の間に何等の矛 必ずしも自利

盾も存しないご認める所に、

スミス經濟學の根本的特徴が横たはる樣に思はるる。

は 以つて、今日の價格經濟を否定するものであると做す博士の説に對し、私は十分に承服し能 は 格經濟を意味するものならば、 つて言へば、生産が交換の爲めに行はるゝ經濟組織に外ならぬ。此の場合に於ける生産の目的と の生産者の目的は、 に其の生産物を賣ることによりて得らるヽ利潤にあることを意味するに外ならぬ。 而してスミ 個 個 |々の生産者の個人的目的を意味するものであるから、 k と謂へる場合の生産とは、茲に考證するが如く、生産に對する國家の態度を示すも 必ずしも個々 の生產者の營利的活動を否定せねばならね。然るにユミスが『消費は生産の唯一 スが 否認したど博士の謂はるヽ『資本的價格經濟』の意味が、今日普通に謂 生産物その物になくて利潤を引出すべき生産物の價格にある。他の言葉を以 の生産者の營利的活動を否定するものでない。 それは生産の側から見れば、 個々の生産者の生産を爲す動機が、 價格經濟を『全然否定』するた 從つてス € スの右の文句を 從つて個 は の目的 るへ ので 價 4

であ とし は 進 いふことで 此點に於て 8) 30 Ī る 0) 0) 價格 か、 福 併し乍ら此 田 博士の 本當 博 經 あ 濟 る。 土 12 0) '悲觀說に全ぐ共鳴するものである。 指摘 對 最近 Welfare の意味に於ての đ る非難 價格 せらるく を進 經濟 ۲ 如〈、 組 めて居るの 科學としての價格經濟學 價格 緻 に對する **今**日 所 得 ان درلا 0) K. 經 餘 反 2 瀕 計 感 組織 b 得 Ó) ፠ る 高 けれども茲に注意を要する 點に は حَ まつて 『價格の世界』であり『價格所得の ŀ١ Ċ 至つては、 ふ事 對 來るに從つて、 する非難ごを混同 かゞ ~`、 果 ï 大きな疑問 て本當の 價格 して であ は 間 經 濟 は 沚 0 0) なら 學 曾 Ú. į 組 福 私 織

思議 資本家 當然であらう。 Š 的生 ٦, 0 <u>產</u> 芒®) に 限 3 n 仴 ばこそ其の研究の對象をば『一 纪 る O) Ū 對象 Ę p's 價格經濟組織である以 'nν ク の大著『資本』 般的意義に於ける生產』 b Ŀ 資本 價 格經 的 剩 温濟學が 餘 價值 0 科學として生れ 研 から限定!て、 究 に外 なら るに 73 かつたのの 佪 の不

組 一个日 言 織 Ó ふさも .. 0) 痯 價 詰 格經濟學は行 銋. なく b Ē 苑 相 ス 遠な ξ ス 0) 詰 つて居 研 の學説に励して祝 は る」と言ひ得るならば、 ッス 諸國 民の宮の 田博士の数を乞ふ 性 質及 それ O 誻 第十八卷 は 原因 價格 經 (第五號 翮 **濟學ではなく** す 3 ŧ E 0 ٣ 九七七 ή それ 價格 11 旣 經 E 隮

3

ム・スミ

ス

64)

科學的

研究を進

めんごする今日の

經濟學は、

sollen

を取扱

ふ哲學にあらざる限

Ď 之に向

叉そ

カゞ

schiklichkeit

Ŀ

瓨

扱

ふ政策にあら

2

る限

5

價

(値岩

ζ

は價格

0)

生

|産分配を除外

す

Ś

能

Ιİ

3

3

Ġ

。之が爲

1:

禍

せられ

くる様に

見えるのは、

私の 組織 それ

遺憾 をば、 カ۶

に思

\$

所である。

爲

8)

12

行は

分配

カジ Ø)

交換に

よつて行はるく

今日

1の經濟

倜

0)

sein

حح

して 生產

取 かゞ

扱ひ、 交換の

زسا

⁶⁵⁾ 66)

商學研究、前揭號、四一九頁。 同上、四一九頁。 同上、四一九頁。 例本來,Einleitung zu einer Kritik der Politischen Okonomie. 6768) Marx. ibid...

 $^{69^{1}}$ 何上博士著、社會問題研究、第四十五册、三頁(通册一五八三頁)。 商學研究、前揭號、四一八頁。 70)

九

七八

說

ル

賣却 要な を意味 値 如 は 胦 生 ø 0) 泚 á 10 Ø) 濟 產 ┗-78)(p[豣 所 C C 3 ķ ح は Ť ح < 物 理 貂 3 第 0) かず 坳 あ 4 組 同 交 ろこ 質 法 居 ħ ď. 論 織 \mathcal{O} 办》 カ> τ 換の 卷十 12 つ ÉŤ 對 如 則 Z る 0 で ふこと ス 一でなく、78) 0 ₹ λ× 期 ځځ \mathcal{O} 酡 衎 あ 象 < 為 會 10 仕 筅 ΙĻ z n ス 侍 章 は 彼等 依 事 5 ó) 1 ĹΊ は ば 生 (= 大體 本家 生産 產 にの あ 0 Ĺ 3 つ 價 あ $\vec{\zeta}$ 富は て彼 Ť 3 豠 彼 中 財 行 0 偛 0 み没頭 支け、 なけ 生 をば 乃至 に於 Z b5 7 は n 緘 0 產 交 郎ち は 0) n n O) 0 勞 **人**換價值 價 岉 間 0) 分 明 働 T 歷 中 n 勞働 分業 富 考 を賣却 また 仐 史 心をな 配 は 格 Ġ せしむる』こと 17 者 的 かっ を除 Ħ 向 ح カゞ を傭 ፌ 之に ′′交 者 賌 0 0 價 Ŀ 3 ځ 7 決定 所 換 認 資 形 本 す đ 办5 外 値 (· 入れ ير (ا 室 á 原 古 對 本 態 若 79 家 12 10 ţ <u>ا</u> ک する。 方 と其 章 福を齎らす 依 依 3 は 料 ることは ₫ 生 義 肵 其 0 る Ł n 0 餌 は 產 Ē 價格 經 割 ⁵⁾ば、 τ 1-價 彼 0 Ţ 0) カコ 手 あり、 行 賌 依 濟 偛 0) あ Ġ n 6 段 30 般 で 本 1 觀 出 是等 0) 組 ح て は 0 を購 τ 附加 外物であ あ r 察し 來 觀 織 は B 的 従つて『各人は交換によつ 貨幣 換言 甪 زرً 察 離 0 Ø) ` 12 形 入して生産を營 て、 其 t 外 態 يح 12 かっ カジ る ዹ 『交換をなすに 0 8 Ö ること 徹 ~º 及 난 2 な ح. ij 資本 は 所 Ť Ġ Ŀ 12 厎 カコ び 此 \hat{o} 筈で 價 あ 混 Ĝ す K. 0) ž 格 資本 'n ł 3 0 莆 旣 n 價 理 就 ľ 回 0 カジ あ ば 旣 L 偛 8 0) 由に 3 早 關 收 3 10 \$ た は 豣 + (= むの 是等 営つ 究 義經 何 す 依 b 係 3 彼 < 依 つて、 ίΞ 等 3 業 彼 丈 n Ó 12 ス は つて、 Ź, で 捧 H 0) あ 3 濟 0 1-ح n 0 3 匥 外 ゖ 組 廽 は は は ス 足 て生 物 の「鋭 味 利 彼 究 7 織 る ٨ z あ 彼 彼 17 潤 間 0) 固 居 0 Ŀ b n n 0 3 活 n 總 ጉ 0) **þ**5 å の Z 0) n 對 ታኝ 觙 す 0) 自 τ 1 有 Ĵ 得 4 自 牛 ij h ر ا な 富 於 身 活 併 富 か 然 ħ h 產 が 研 共 得 物 10 τ 以 カゞ Ŀ 價 ح ۲ 兆 價 爲 其 ح 必 0) 4

⁷¹⁾ Wealth of Nations, Vol. I, p. 19. 72) ibid., p. 24.

⁷³⁾ ibid., p. 50.

⁷⁴⁾ Cannan, Lectures of Adam Smith, editor's introduction, p. xxix.

 ⁷⁵⁾ Wealth of Nations, Vol. I. p. 30.
76) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, (Gouner's ed., p. 258).

なる た 尤も山なくして山の高さなきが如く、 るこざなくし 一屬性である。 Ť, 富と價値との同じからざること、 大さに依存する ものではなくて、直接に 富の大さ 價値たることはあり得ない』のであるが、併し富によりて得らる 富なくして 價値 猶ほ山と山の高さの異なるが如きも はあ b 得な ر. د 如 何な 容積重量 3 物 Ý こ人間 若 使 < iż 用 0) の幸 個 價 カシ

福

の程度は、

價値の

ス 同 も言ふ通り、 じ時、 依存する樣に見える。 同じ處に於ては、 同一の時處位に關する限り、 總ての商品の實質價格と名目價格とは、 然らば富の大さと價値の大さとは、 富の大さこ價値の大ささは正確に比例する。 無關係 互に正確に比例する』とス なものであ Ď 得や 從つ ż ́лэ ? 7.

Ø ス る社 ŧ ス は 會の勞働に依つて年々 到る 所に於て、 國民の に蒐集され生産さるゝ物の全體、若くは同じことに歸する所の(what 年々 の生産物 と其の價値若くは價格さを同視す る 。 例 へば 一あら

comes to the same thing)其の全價格は云々』といひ、 及 眞の分量卽ち 大さ其もの 3 比例するもの に役立つ』とも言つてゐる。 び勞働の年 'nŝ 直接に 生産的な働き手をは、 の生産物の交換價値、 なることを認めてゐる。 人間 の幸 福 是に由りて見れば、 に比例するのであるから、 自然に増加叉は減少し、 其國の總ての住民の眞の富及び收入をは、 さうして享樂遞減の法則を姑く度外に措くならば、 彼れは少くとも宮の大さと價 又『資本のあらゆる増加又は減少は、 司 從つて其の結果として、 の時處位に關する限り、 増加又は減少す 値 の大さ 其國 ٨ 勞働 こが互 間 0 富 の幸 土 Ö 0)

「博士と共に、 ス Ę スの胸中に Welfare の觀念の往來して居たことを認むるに客でない 殊

第十八卷

(第五號

t

九七九

福

0 私

i

價

循

0)

丈

ج

ū

比

例す

Ś

と見ることは誤りではな

からう。

は

Ħ

冼

7

'n

ム・スミスの學説に關して福田博士の数を乞ふ

Marx, Das Kapital, Erster Band (S. 7). Wealth of Nations, Vol. I, p. 39. 77 78 79

ibid., p. 54. ibid., Vol. I, p. 320. 80)

九八〇

說

福を将來し得ると信じた所にマ りて國民の幸福を水めた所にユミヌがあり、資本の公有と生産の公營に依つてのみ廣く人類の幸 策による金銀の蓄積に依つて人間の幸福を祈念した所に 彼等の議論の岐るへ所は、謂ふ所の幸福を將來するに當つて、如何なる原則と手段を主張するか か かゞ つて得られるこ考へたればこそ、あらゆる奬勵と制限に力を 用ひたもので あらう。 の點にあると思ふ。 に奮鬪したものは、正に厚生哲學の第一人者に推されねばならぬであらう。私の見る所に依れば、 然らざるはなからう。 つて彼れを厚生哲學の鬪士であるさ言ひ得るならば、凡そ政策を論ずる學者の大多數は、比々皆 に彼れの經濟政策の原理が、國民の幸福にあつたことは疑ふべくもない。俳し乍ら、其の故を以 |否かにあるのでなくて、人間の幸福を將來すべき手段を何れに求めたかに存する。保護干涉政 ! スミスと區別せられ、スミスがマルクスと區別せらるヽ要點は、彼等が人間の幸福を思念した 金銀の蓄積を唯一の日的とした mercantilist でさへ、人間の幸福がそれに依 殊にかのマルクスの如き、其の惨憺なる生涯を通じて、人類の幸福のため n クスの特徴がある。私は斯樣に考ふるものである。 Mercantilist があり、自由放任政策に Mercantilist